

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 11 日現在

機関番号：32643

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370309

研究課題名(和文) 18世紀英国における陶磁器、メランコリー、女性の関係

研究課題名(英文) Porcelain, Melancholy, and Women in Eighteenth-Century England

## 研究代表者

大野 雅子 (ONO, MASAKO)

帝京大学・外国語学部・教授

研究者番号：80233229

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、17世紀から18世紀の英文学において、「ティーポットに変身する女性」というイメージが頻繁に見受けられることに疑問をもったことから出発した。女性を器にたとえる伝統は聖書に始まったものであるが、消費文化が勃興しつつあったこの時代においては、紅茶や陶磁器などの贅沢な品に熱狂する女性たちの過度な情熱は性欲の表れだと思われていたことを発見した。女性と消費文化とは強く結びついていると一般的には思われている。しかし、本当に女性は本質的に貪欲なのか。女性は消費文化において主体性を確立したとしばしば言われるが、実はそれすらも男性が構築した神話であるという結論に達した。

研究成果の概要(英文)：As the eighteenth-century English infatuation with porcelain comes to be translated as that of English women, the Biblical metaphor of “weaker vessel,” which served to objectify women as the frail sex is attuned to define women as the seeker of the vessel. As a result, the fragile china which is endeared by women comes to be identified as the women who endears it. The feminization of porcelain is what occurs when sexuality and commodification are conjoined in constructing the self-reflexive relationship between the desiring subject and the desired object in the male imagination of eighteenth-century England. Although women as the desiring subject might be figured as a statement of the increasing autonomy and independence in the consumer society, I argue that the agency of the gaze which brings the female subjectivity into being is male. Women as the desiring subject, as well as women as the desired object, is a construct created by the patriarchal fantasy of the age.

研究分野：英文学

キーワード：18世紀 陶磁器 女性 女性蔑視 消費文化

## 1. 研究開始当初の背景

(1)消費文化：17世紀後半から18世紀の英国においては消費社会が勃興していた。大航海時代を通じて英国にもたらされた中国産の絹、茶、陶磁器、モルッカ諸島産の香辛料、インド産の綿織物や香辛料、アメリカ大陸産の毛皮、カリブ海産の砂糖などの品々によって、英国の商人たちは巨大な富を儲け、その結果、疑似ジェントルマン階級を形成した。彼らが引き起こした社会変動は英国に消費社会を実現したのであった。消費文化の誕生に関する先駆的な研究には、Neil McKendrick, John Brewer, J. H. Plumb の *The Birth of Consumer Society* (1982) がある。以前は清教徒革命と名誉革命、それに続くジョージ王朝の勃興という政治的的局面からのみ考察されてきた17世紀から18世紀の英国研究に、「消費文化」という新しい視点を切り開いた。

(2)茶と陶磁器と女性：18世紀英国において茶は高価であるがゆえに上品な飲み物とされたので、茶を飲む女性は贅美の対象となったが、同時に茶を飲むという行為に伴う「おしゃべり」と「怠惰」は女性に対する軽蔑の念を助長することになった。茶とともに女性の物欲の対象とされたのが陶磁器である。ソースティン・ヴェブレンは『有閑階級の理論』において、有閑階級は自らの富を見せつけるために「顕示的に」消費する、さらに、女性は夫や家族の代わりに「代替的に」消費するという理論を展開する。女性と消費がアプリオリに結び付けられているが、なぜ女性は本質的に貪欲とされるのかを解明する研究はなされていない。

(3)女性を器にたとえる伝統：新約聖書において女性は「脆き器」にたとえられる。女性は「脆い」がゆえに大切にされなければならないという意味であったが、そのもとの意味は時代とともに変化してゆく。「脆い」は道徳的な脆さを表す言葉となり、「器」は女性の性器の暗喩となってゆく。

## 2. 研究の目的

(1)女性を器にたとえる伝統：17世紀後半から18世紀前半にかけて劇や詩の中で、明白に性的なニュアンスをともなって女性は器にたとえられるが、その場合の「器」とは「陶磁器」である。中国製の陶磁器にヨーロッパ人たちが熱狂した時代の反映である。本研究の第1の目的は、17世紀後半から18世紀前半にかけて英国で書かれた劇や詩作品においてどのような女性が器や陶磁器にたとえられたのか、また、それは何を意味していたのかを調査することであった。

(2)陶磁器を収集する女性たち：女性は陶磁器にたとえられるだけではない。女性は陶

磁器を収集することにも情熱を燃やす。John Gay (1685-1732) の “To a Lady on Her Passion for Old China”(1725) において詩人は陶磁器に夢中の女性に向って、「そんな脆いものに情熱を傾けるな、女性は陶磁器とは違って年をとると売れなくなる、だから今自分の愛を受け入れろ」と、伝統的な “carpe diem” の主題を陶磁器のモチーフによって変奏する。Frances Burney (1752-1840) の *Camilla* (1796) や Susan Ferrier (1782-1854) の *Marriage* (1818) においては陶磁器に熱狂する女性が浅薄な女性として皮肉を込めて描写されている。L. Weatherill (*Consumer Behaviour and Material Culture*, 1996) は丹念なデータ分析に基づいて特に女性だけが陶磁器収集を好んだわけではないと結論づけるが、そうだとしたらなぜこのようなイメージが生まれたのだろうか。本研究の第2の目的は、女性は陶磁器好きであるというイメージが、17世紀後半から18世紀にかけての英文学においてどのように構築されたか、それは実際の歴史的事実と同じであるのか異なるのか、歴史・社会学的調査の手法も取り入れて探求することであった。

(3)陶磁器に変身する女性たち：女性は陶磁器に変身することもある。Alexander Pope (1688-1744) の “The Rape of the Lock” で描かれる “The Cave of Spleen” には “living Teapots” が現れる。Pope の友人 Ambrose Philips (1674-1749) によって書かれた “The Tea-Pot: Or, The Lady’s Transformation” (1725) という詩においては、女神たちに嫉妬された女性がティーポットに変身させられる。ティーポットを擬人化する考え方は童謡の “I’m a Little Tea-Pot” にも受け継がれているが、なぜこのようなイマジネーションが発生したのかは謎である。本研究の第3の目的は、女性が陶磁器に変身するイメージの意味と重要性を様々な文学作品において探求することであった。

(4)女性とメランコリー：メランコリーとは17世紀後半までヒステリーと同義であった。Robert Burton (1577-1640) の *The Anatomy of Melancholy* (1621) はメランコリーの症状のひとつとして「幻想」をあげている。自分の体が犬や熊やバターやガラスになってしまったと思うのである。Reginald Scot の *Discoverie of Witchcraft* (1584) や Thomas Walkington の *The Optick Glasse of Humors* (1607) も土器に変身したと思ひ込む人間のエピソードを語っている。17世紀前半まではメランコリーは知的または芸術的才能をもった男性の特権的病とされていたが、17世紀後半以降は絶えず体の中に湧き起こる “vapours” のために気分が落ち込む女性たちが文学作品や日記などに記録されるようになる。物質文化の発達とともに、女性が贅沢で怠惰になっていったこと、また、男性が女

性の贅沢と怠惰をことさら誇張したことが原因であろう。本研究は17世紀後半から18世紀にかけての英国における女性とメランコリーの関係を解明することを第4の目的とした。

### 3. 研究の方法

(1)17世紀から18世紀にかけて書かれた「陶磁器」がイメージとして表れる詩、劇、小説、散文などの一次資料研究：これらの文献は本として出版されているもの、Early English Books Online (EEBO) や Eighteenth Century Collection Online (ECCO) などのインターネットサイトから入手可能なもの、British Library やアメリカの Huntington Library に manuscript として保存されているものなど多岐にわたる。

「陶磁器」がイメージとして表れる詩：The Earl of Rochester, John Gay, Alexander Pope, Jonathan Swift (1667-1745) などの詩人たちの詩に陶磁器とそれに夢中になる女性たちが皮肉なタッチで描かれている。そこにおいては陶磁器を買い求める女性は陶磁器のメタファーで語られる傾向がある。陶磁器を求める女性が陶磁器と同一化するというのとはどういうことなのか、詩を詳細に分析することによって解明する。

「陶磁器」がイメージとして表れる劇：William Wycherley の *The Country Wife* (1675) には、婦人たちが次々と china closet という小部屋で浮気を楽しむ“china scene”と呼ばれる場面がある。この場合陶磁器が象徴するのは男性性または性欲であるが、陶磁器だけではなく陶磁器を飾る小部屋がエロティックな象徴性を帯びることは興味深い。John Ford, *'Tis Pity She's a Whore* (1633), George Etherege, *The Man of Mode* (1676), Mary Pix, *The Innocent Mistress* (1697), Susanna Centlivre, *The Busybody* (1709) など、贅沢好きな女性または性欲の激しい女性が登場する劇作品は、陶磁器だけではなく様々な「物」に満ち溢れている。どのような「物」がどのような価値や象徴性をもっていたか、詳細に分析し、陶磁器の象徴性と比較する。

「陶磁器」がイメージとして表れる小説・散文：Frances Burney の *Camilla* においては、情愛あふれる主人公 Camilla の対立項として Indiana という浅薄な女性が登場する。彼女は人間の価値を陶磁器などの贅沢品を通してしか判断できない女性である。Susan Ferrier の *Marriage* において、Juliana は夫が破産寸前であるにも関わらず、ティーポットや中国製の置物を買うことに夢中になる。その他、Burney, *Evelina* (1778), Daniel Defoe, *Moll Flanders* (1722), *Roxana* (1724), Eliza Haywood, *Love in Excess* (1719-20), *Miss Betsy Thoughtless* (1751), Samuel Richardson, *Pamela* (1740), *Clarissa* (1747-48) など、女性を主要人物に据えた小説には陶磁器への言及が多い。

これらの小説における女性登場人物と陶磁器との関係を分析し、どのような場面でどのような女性が陶磁器に言及するのか、陶磁器がストーリー全体の中でどのような役割をはたすのかを考察する。

(2)17世紀から18世紀にかけて日記、手紙、遺書、財産目録研究：18世紀イギリスの女性が陶磁器などの茶道具をどのくらい所有していたかについては、L. Weatherill が *Consumer Behaviour and Material Culture* (1996) において研究している。丹念な財産目録調査によって Weatherill は様々な「物」の地域別、男女別、階級別の所有状況を明らかにしている。このようなアプローチを見本にして、17世紀後半から18世紀前半にかけて男性よりも女性のほうが陶磁器収集に熱狂していたのかどうか、そうだとしたらなぜなのか、どのような階級、年齢層、地域にそれが顕著にみられるのか、当時の日記、手紙、遺書、財産目録などの調査・分析を通じて考察する。

(3)17世紀から18世紀にかけて書かれたメランコリーに関する資料研究

メランコリーについての論文・メランコリー対策のための料理本研究：Timothy Bright, *A Treatise on Melancholy* (1586), Thomas Walkington, *The Optick Glasse of Humors* (1607), Robert Burton, *The Anatomy of Melancholy* (1621), Thomas Sydenham, *Epistolary Dissertation* (1681-82), Richard Blackmore, *A Treatise of the Spleen and Vapours* (1725) など、16世紀から18世紀前半にかけてのメランコリーについての論文を研究する。17世紀前半までは特権的資質とされたメランコリーであるが、18世紀に入ると、女性においてはヒステリー（または“spleen,” “vapours”）という現象として現れる。メランコリーの定義付け、症状についての分析などはどのように変遷してゆくのか、その歴史的過程を詳細に検討する。17世紀後半は料理本が数多く出版され始めた時期でもある。その中には、*A Choice Manual, or Rare and Select Secrets in Physick and Chyrurgery* (1653) などのように、メランコリーの治療のための食事や薬の処方が記されているものもある。治療法の研究を通してメランコリーがどのようなものとして捉えられていたのかを考察する。

メランコリーをテーマにした文学作品の研究：メランコリーを題材にした文学作品には次のようなものがある。John Marston, *The Malcontent* (ca. 1603), John Ford, *The Lover's Melancholy* (1629), John Milton, *Il Penseroso* (1645), Anne Finch, “The Spleen” (1709), Oliver Goldsmith, *The Citizen of the World* (1760) 中の “The English Subject to the Spleen”。また、Defoe, *Robinson Crusoe* (1719) や Swift, *Gulliver's Travels* (1726) など、

メランコリーに言及する作品は他にも数多く存在する。これらの作品に描かれるメランコリーは、男性の理想的資質としてのメランコリー、欲望を成就できないときに生ずるメランコリー、女性特有のヒステリーを伴うメランコリーの3種類に分けることができる。どのようなメランコリーがどのような場面で描かれるのか考察する。

#### 4. 研究成果

(1) Ambrose Philips (1674-1749) の “The Tea-Pot: Or, The Lady’s Transformation” (1725) は、女神の嫉妬をかっした地上の女性がティーポットに変身させられる様を異様なまでの詳細さとともに描写する。口は丸くなり、唇が閉じられて蓋になる。その蓋の上には、かつての柔軟さと滑らかさを失った舌が持ち手となって乗せられる。詩人は、女性の舌が持ち手に変身する様子に何行も割く。舌に焦点が当てられる理由を研究者は舌と女性器との関連にあると考えた。A Woman Killed with Kindness (Thomas Heywood, 1607) のエピグラムには「おしゃべりな女性は浮気性である」とある。口と貞節と家の敷居の3つを女性は守らなければならないという教えは昔から存在していた。家の敷居が低ければ女性の貞節は守られない。女性の口が軽ければやはり貞節も軽くなる。この詩の中の女性は積極的に男を誘惑したわけではない。天上の神々も地上の男たちもこの女性の魅力に自らとりこになったのだ。しかし、当時の考え方としては、男性を魅惑する女はそれだけで性欲の強い女と断定された。この女性はそのために罰せられ、その身体は今や閉じられたのだ。このように、研究者は、この詩が、口も性器も開きっぱなしの女性がティーポットに変身することによって、両方を閉じなければいけない状況になったことをうたっている詩であると解釈した。

(2) 次に研究者は「ティーポットに変身する女性」のイメージが表れるメジャーな詩、Alexander Pope (1688-1744) の “The Rape of the Lock” の解釈を行った。ヒロインのベリンダは男爵に髪を一房切り取られる。その瞬間、彼女の守護精エアリエルが退き、代りにメランコリーの精霊アンブリエルが登場する。アンブリエルはベリンダのために怒りと嘆きを手に入れるために “The Cave of Spleen” に降りてゆく。この洞穴には、歩く鍋やしゃべるガチョウパイ、コルクで蓋をしてくれと叫ぶ瓶などとともに、片方の腕を突き出し、もう片方の腕を曲げているティーポットもいる。抑圧された女性の心理が霊気となってみなぎるこの洞穴は実はベリンダの心象風景である。その心の内はめったに明かされないベリンダ、その代わりに彼女を取り巻く物たちによって取って代わられるベリンダであ

るが、男爵が自分を襲うようにと初めから秘かに誘っていた。性欲に満ちたベリンダを待ち受けるのはやはりティーポットへの変身という運命であった。

以上2つの詩の解釈を通じて研究者は、ティーポットまたは陶磁器のイメージが17~18世紀の英文学においては女性蔑視の伝統と結びついて使用されていたことを発見した。おしゃべりな女性も魅力的な女性も性欲が強いとされ、陶磁器のようにすべすべと滑らかなその肌は男を誘惑するためにあると思われた。そしてその性欲の強さゆえに、自らの比喻である陶磁器に変身させられ、その身体は閉じられてしまうのだ。

(3) 女性は陶磁器の比喻で語られたが、同時に陶磁器を収集するのも好きでもあった。17~18世紀の女性たちの陶磁器に対する熱狂は、王室の女性たちによって先導されたものでもあった。メアリーもアンも紅茶好きで陶磁器好きで有名であった。アン女王はPopeの “The Rape of the Lock” の中でも、「時々政治をやり時々お茶を飲む」と揶揄されるほどであった。テムズ川沿いリッチモンドに残るハム・ハウスという屋敷の女主人ローダーデル公爵夫人の居間には、今でも白いティーポットがジャヴァ産の漆塗りのテーブルの上に座っている。彼女は紅茶好きで有名であった。SteelとAddisonの Lover の中でも、Mr. Tradewell という男性が自分の妻が服を質に入れてでも陶磁器を買うという悩みを打ち明けている。

なぜ女性は陶磁器好きなのか、また、なぜ陶磁器は女性的だと思われたのか。この疑問に1つの解答を与えるのは、Laura Brownである。Brownは *Ends of Empire* (1993) の中で、当時誕生しつつあった消費社会に対する恐怖の念と女性という未知の性に対する恐怖の念とが男性の中で同一化されたと言う。そのため、消費を牽引するのは女性であり、女性は買い物好きであるというレッテルが貼られた。女性という性と消費との間にイデオロギ的同一化がはかられたのだ。多くの批評家が、この当時、女性は消費を契機として主体性を確立しつつあったと論ずるが、その主体性すらも男性によって構築されたものだと言った研究者は考えた。

(4) 女性は陶磁器であると同時に陶磁器の収集家でもある。客体であると同時に主体でもあるのだ。主体と客体とが一致する様を検証するために、研究者は、William Wycherley (1641-1715) の劇 *The Country Wife* (1675) とその他の作品の解釈を行った。*The Country Wife* においては、性機能を失ったふりをするホーナーのもとに人妻たちが次々と押し寄せ、彼の china room で陶磁器を見せてもらうという言い訳のもと、性欲をほとばしらせる。陶磁器は今までの批評においてはホーナーの男根の象徴であるとされているが、研究者

は、女性たちの性欲の象徴であると解釈した。女性たちはホーナーその人を愛しているわけではなく、性欲のはけ口を求めているだけなのだから。(3)で述べた女性と消費とのイデオロギー的一致とは、女性の有り余る欲望に対する揶揄に他ならない。物に対する欲望は性的欲望と似通っている。*The Country Wife* において、女性たちが陶磁器を求めるとき、彼女たちは性欲に満ちている。陶磁器に対する情熱が男性に対する情熱の隠れ蓑として機能しているのは、女性と消費、女性と欲望との「イデオロギー的一致」のゆえである。

(5) 上記(3)と(4)の考察から、女性が消費社会の立役者となったのは、女性が本質的に貪欲であるというのが理由ではないと研究者は結論付けた。女性の性欲の強さを嘆く話はチョーサーのカンタベリー物語の中にもいくつか見られる。男性にとって女性の性欲を満たすことができないかもしれないというのは脅威であったため、女性の性欲の強さという神話が出来上がり、文学作品の中でもしばしば取り上げられてきた。性欲が消費社会の勃興とともに、物を対象とする物欲に変貌する。物欲に変貌してももとは性欲だから、その物欲はエロティックな言葉で語られる。陶磁器と女性と性欲との関係はこのように出来上がったのだと考察した。

(6) メランコリーは女性の性欲の強さがひとつの原因だとされた。Pope の Belinda も髪を切られたあとメランコリーに陥るが、その激情は彼女の性欲の強さゆえだとされる。本研究においてメランコリーも視野に入れる予定であったが、まとまった結論を得ることができなかった。

(7) 本研究の方法の1つとしてイギリスのカントリーハウスなどを訪れ、陶磁器コレクションについて調査する予定だった。いくつか訪問はしたが、研究の方向性が、女性が実際陶磁器を収集したかどうかという問題ではなく、女性の欲望という神話の構築という方向に行ったため、特にまとまった結論を導き出すには至らなかった。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

大野 雅子 (ONO, Masako)  
帝京大学・外国語学部・教授  
研究者番号: 80233229